

巻頭言



補綴歯科臨床の未来戦略

Future Strategies for Prosthetic Dentistry

大阪大学名誉教授 矢谷博文

Hirofumi Yatani

Professor Emeritus of Osaka University

「脳卒中と循環器病克服5か年計画」の5戦略事業が進む中、2018年12月に脳卒中・循環器病対策基本法が成立し、昨年12月に施行された。これにより今後日本人の健康寿命の延伸に向けての実質的な成果が期待されている。このように医科では、脳卒中・循環器病が死因の第2位、「要介護5（寝たきり）」の原因の1位であることもあり、国を巻き込んでの法律制定まで踏み込んで脳卒中・循環器病対策を大きく前進させようとしている。翻って歯科では、各分野でそれぞれに健康寿命の延伸に向けての努力が続けられているものの、散発的で、歯科全体を俯瞰したグローバル性や、10年、20年先を見通した先見性に欠けることは否めない。「脳卒中と循環器病克服5か年計画」を日本脳卒中学会と日本循環器学会が手を携えて策定し、実行しているように、歯科臨床の未来戦略を考えるうえで、個人ではなく学会を基盤とした、さらに進んで複数の学会の協力体制を基盤とした活動が不可欠であるように思われる。そのような立場に立って補綴歯科臨床の未来戦略を考えてみた（図1）。

1. 臨床・研究の基盤整備

補綴歯科臨床により実質的に健康寿命の延伸に貢献するためには、高度な基礎研究・臨床研究を実施する前にそれらの基盤を整備しなければならない。すなわち、疾患データベース登録事業とバイオバンク構築が必要である。前者に関しては、日本補綴歯科学会では早くからその重要性に気づき、「歯の欠損の補綴歯科診療ガイドライン2008」を作成したものの、残念ながらそれを利用したデータベース構築には至っていない。日本人の歯は、どの時期に、どの部位から、どのような理由で欠損していくのか悉皆性のある、また時間継続性のあるデータ集積が行える制度の確立を日本補綴歯科学会がリーダーシップをとって目指すべきである。後者としては、抜去歯、歯髄細胞、歯根膜細胞等のバイオバンクを構築し、再生医療に繋げる体制の整備を目指すべきである。

2. 基礎研究

歯科の三大疾患である、カリエス、歯周病、顎関節症の病因・病態の解明に向けた研究が基礎研究の最大のテーマであろう。そのための具体的戦略として、疾患モデルの確立と標準化が必要であり、病因のなかでも特に素因の解明に向けた遺伝子・ゲノム解析、オミックス解析を行うべきである。iPS細胞等の幹細胞研究も補綴領域にあっても再生医療を実現するためには欠かせない研究分野である。

3. 橋渡し研究

上記の基礎研究の上に橋渡し研究がある。歯科関連疾患の関連遺伝子やバイオマーカーの探索を行うことにより新たな診断法や機器の開発につなげる研究が行われるべきである。基礎研究により解明された疾患の病因・病態をもとに治療標的の探索を行うことで創薬に繋げていくことも有意義であろう。同様に、解明された病因・病態から新たなシーズを探り、それを基にした医療機器開発を行い、予防や治療に繋げていく戦略あるいは顎機能回復に繋げていく戦略も重要である。さらに歯や歯周組織の再生法を開発し、再生医療へと発展させる道筋を探ることも重要な橋渡し研究となろう。

4. 臨床研究

臨床研究は、オールジャパン体制で行われることが理想である。それにより臨床研究や治験のレベルを国際水準に引き上げ、得られた高い臨床エビデンスを世界に向けて発信すべきである。

有望な関連遺伝子やバイオマーカーを基に開発した新たな診断法や医療機器を用いてより確実な発症予防やより高精度な診断に繋げていくこと、橋渡し研究により創り出した新たな薬物を用いた原因治療や重症化予防を行うこと、あるいは新たに明らかにしたシーズを基に開発した医療機器を用いた原因治療や重症化予防を行うこと、さらには再生医療により歯や歯周組織の機能再建、さらには顎機能の再建を実現することは今後実施すべき臨床研究のテーマであることに疑いはない。

以上、言うは易し、行うは難しというような勝手なことばかりを述べさせていただいたが、歯科医療の未来へ向けての戦略は、大所高所から、またこの先10年、20年先を見据えて練ることが重要であり、今後の補綴領域の基礎研究、臨床研究が目指す方向を誤らないことが肝要である。

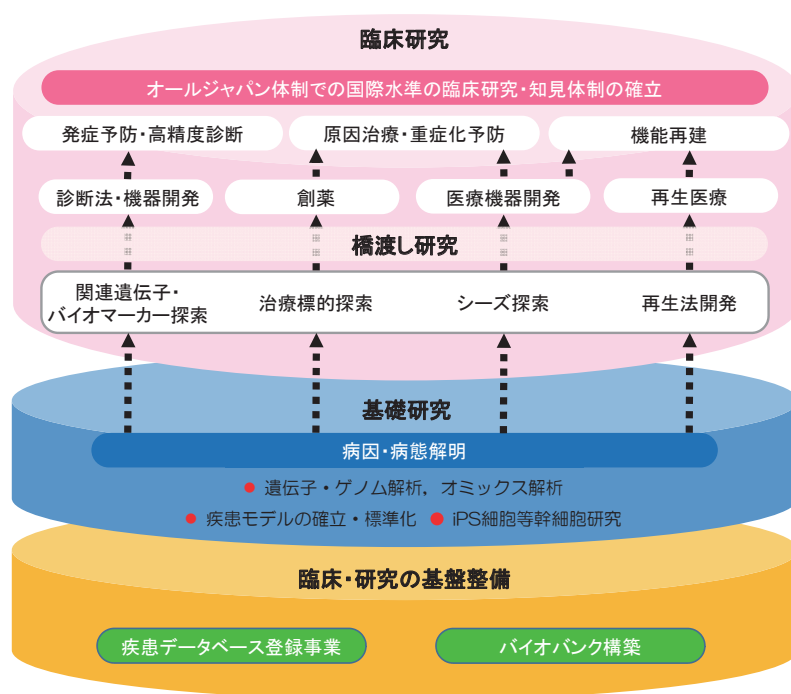


図1 補綴歯科の未来戦略を考える

脳卒中と循環器病克服5か年計画2016より引用, 改変